

イタコ中村タケを記録する会編

『イタコ 中村タケ』

山田 巖子

はじめに

青森県津軽地方では、現在イタコを稼業としている者はいない。しかし、南部地方ではまだ数名が活躍している。本書は八戸市在住のイタコ中村タケさん（一九三二年生まれ）の保持する「唱えごと」の音声と映像に解説を加えたものである。評者はこの「唱えごと」という表記に不意をつかれた。「経文」「祭文」「口寄せ」「祈祷」「呪い」と言われてきたものも、分解すれば「唱えごと」であり、「唱えごと」と表記することで、イタコのもつ「秘儀性」や「権威性」の霧が払われ、フラットな態度で、「唱えられたこと」自体を虚心に捉えられる、という思いがした。

本書には小島美子、薦田治子、沢井邦之、角美弥子、中山一郎の五名の研究者が携わっている。この五名は琵琶盲僧の映像資

料の作成にも関わっていた（永田法順を記

録する会編『日向の琵琶盲僧 永田法順』二〇〇五年 アド・ポポロ）。音楽史や音響、民俗映像に造詣が深く、経験豊富な集団だからこそなした偉業といえる。

イタコの音声・映像資料については、二〇一二年に青森県民俗文化財等保存活用委員会が『津軽のイタコの経文・祭文』を、翌年に『津軽のオシラ信仰―青森県津軽地方』を刊行している。しかし、前者は一九八〇年度の文化庁依頼の調査の際の音源を使った音声資料であり、後者は昭和一〇年代と一九九八年に記録された映像資料である。現役の南部イタコの保持する唱えごとを網羅し、かつ入手可能な記録集は、空前にして絶後といえよう。

一 本書の構成

本書の解説と詞章の目次は次の通りであ

る。単独の唱えごとの名称は（～）、唱えごとの組み合わせに名称がある場合は（～）で示されている。

第一章はじめに―イタコの商売／第二章《オシラ遊ばせ》 1. 《オシラ遊ばせ》

の儀礼 (1) 前読み (導入部) (2) 祭文 (中心部 その一) (3) 託宣 (中心部 その二) (4) 後読み (終結部) / 第三章《口寄せ》

1. 《口寄せ》の儀礼 (1) 《神仏迎え》―場による迎え方の違い (2) 《ホトケの口寄せ》 (3) 《神仏送り》 2. 《口寄せ》に用いる唱えごと (1) 一代様 (守り本尊など) / 第四章《マジナイ》と《ウラナイ》 1. 《マジナイ》の儀礼 2. 《マジナイ》に用いる唱えごと (1) 導入部の唱えごと (2) 中心部の唱えごと その1―《マジナイ》全般に

対する唱えごと (3) 中心部の唱えごと その2―病気の治療のための唱えごと (4) 終結部の唱えごと 3. 《ウラナイ》の儀礼 / 第五章その他 1. 取り子 (1) 取り子の依頼 (2) 取り子の儀礼 2. 門付け

目次の前に「発刊にあたって」として編

者の一人、中山一郎のことがあり、山折哲雄、佐々木宏幹、小島美子の「寄稿」が

あり、「唱えごと収録一覧」「詞章作成にあたって(凡例)」「DVD・CDの編集と再生について」がある。解説と詞章の後に「中村タケ プロフィール」「あとがき」「唱えごと索引(五十音順)」「参考文献」「英文解説」が付く。使用者の便宜を考えた行き届いた作りとなっている。

二 本書の方法

一般に憑依・託宣をもつぱらとする宗教者は撮影や記録を嫌う。本書の記録者たちがその点をどのようにクリアしていったのか見ていきたい。確認しておきたいのは、本書は地域に住む依頼者と巫女のコミュニケーション行為を問題にした記録集ではない、という点である。本書はタケさんの自宅で記録され、唱えごとは「再現」という形で記録されている。依頼者がいないと成り立たない唱えごとは調査者自らが依頼者となり、その託宣を聞いている。したがって、イタコの従来の顧客である「お商売」先の人々とのやりとりや、信仰を共有する集団と宗教者がその時々により出す信仰世界といった点を本書に期待することはできない。依頼者と宗教者からなる儀礼的な空間

に第三者が加わることで「場」が損なわれることは調査者の誰しものが経験してきたことである。本書は調査者が当事者の片方となることで、これだけの記録が可能になったといえる。

本書はこのような記録方法を取ったことで生まれた齟齬をも丁寧^①に記録している。例えば、第二章《オシラ遊ばせ》では、タケさんの「お商売先」の地元の家からオシラサマを借りて、儀礼行為を撮影している。記録者の家にあるオシラサマではないので、託宣は当然、記録者に向かつてなされるべきものではない。そのため、「タケさんは、本記録のために架空の占いをすることを躊躇された」が、「後日、改めてお願いして」(54頁)撮影が可能になったとある。巫女自身のとまどいや忌避感もまた記録の対象となっているのである。

第三章《口寄せ》⑤《ホトケの口寄せ

例二》では、「記録のためということで丁寧な口寄せを心がけたためか、長大な口寄せとなった」(94頁)と記され、この場合もまた「特殊な例」となったことが記されている。どのような状況の下で、その資料が成立

したのかを記録することで、視聴者や読者に誤解を招かないように配慮されている。このような撮影状況に関する記述は今後の記録映像には必須のものとなってくるだろう。

三 記録の工夫

本書の特徴は、第一に、テキストとして、望みうる限りで信頼に足るものとなっていることである。先行研究を読み込んだ上で一つ一つに本文校訂がなされている。先行研究での記録の有無や過去の記録との異同についても指摘されており、今後、本書を底本として、調査資料を比較研究してゆくという方法があり得るであろう。索引も完備したテキスト化がなされたことで、民間説話と芸能(山伏神楽の詞章)などを横断的に渉猟し、信仰史の研究につなげてゆくことも可能であろう(例えば小池淳一「神を名づけた話―山の神出産譚と陰陽道と」『國文學 解釈と教材の研究』一九九九年一二月号 學燈社)は、そのような方法の先行例である)。法霊神や蒼前など東北特有の民間神の登場する詞章や具体的な病名を記した呪いの記録は民間の「知識」の配置をめぐる研究との接合を期待させる。

次に、旋律の記述に多くの関心が払われていることである。「詠唱」は、「音節の引き伸ばしを伴い、確定的音高があるもの」、「朗誦」は、「音節の引き伸ばしがなく、確定的音高があるもの」、「吟誦」は「音節の引き伸ばしがなく、確定的音高がないもの」(15頁)と定義され、それぞれの唱えごとにその區別が記されている。また、儀礼の前にそれぞれ「吟誦」が示されている。これを編者らは「地の祈り」と名づけている。「タケさんは、いきなり『本文』だけを唱えることはせずに、たいていは前後に神仏への祈りや感謝の言葉などを添える」とあり、「儀礼全体」を扱うという観点から(14-15頁)収録した、とある。このような序章からの収録は、口ならしの吟誦から、朗誦に至る声の技術として捉えることができよう。

三番目に特徴的なのは、テキストと声法、しぐさの関わりが示されている箇所のあることである。圧巻は第二章《オシラ遊ばせ》の祭文(へしまん長者)である。「朗誦的な部分ではオシラサマを胸に持ち、詠唱的な部分ではオシラサマを頭上に高く翳して遊ばせる」(43頁)という旋律と動作の関係を目

の当たりにすることができるといえる。また、「しまん長者が姫を探す第一〇節では、朗誦と詠唱が細かく交代し、それに伴って動作も同様に細かく交代し、しまん長者の狼狽ぶりを思わせる巧みな表現となっている」とあり、オシラソバセの演劇的な性格を知る貴重な映像といえよう。語り物としぐさ(身体動作)という問題群は、視聴覚資料によつて新に開けた問題群であるといえる。

最後に特徴としてあげられるのは、編者たちがイタコの情報経路について留意している点である。師匠から弟子へという縦の経路は従来強調されてきたが、横の情報伝達については十分な資料が蓄積されていない。タケがオシラサマ遊ばせの終盤に唱える(歓喜天こんだいす)は、津軽のイタコから聞き覚えていた(63頁)。「いさごのはつう神に申す」というマジナイは「五十代のころに、三戸郡名川町のイタコ佐々木ユキさんに」(172頁)習ったという。これらの資料は、イタコが、実践の必要から新しい「知識」を絶えず修得していることを示している。その一方で、「門つけ」は、習ったけれども実践したことがない、しかし最

初に習ったのでよく記憶している(283頁)、などというエピソードが示され、実践の必要以外にも学習の「時期」が、「知識」の修得にとつて大事であることも示されている。このような情報への目配りは重要なものであるが、それらは声の修得過程や記憶法といった問題群には収斂してゆかない。

四 同時代を生きるイタコ

本書では、冒頭の寄稿者・佐々木宏幹の「消えゆく文化の記録を今こそ」という標題に象徴されるように過去のものとなりつつあるイタコ信仰の全貌を記録しようという志向が強い。先行研究を読み込むという姿勢もみうけられる。例えば、津軽イタコの記録から弓太鼓に言及し、「南部のイタコたちも、かつてはこの弓太鼓を用いていたのだろう」(71頁)と記述する。しかし、このような記述は危うい。

本書の最後に置かれた「中村タケプロファイル」を読めば、タケさんの人生には「現代史」が刻まれていることを読み取ることができるといえる。昭和一九年(一九一九年)に師匠に弟子入りするも、戦時中であつたため、住み込みでは

なく通いで学び、戦後の混乱期に修行を終えたため、成巫儀礼は昭和二二年まで待った、とある。門付けをしたこともなく、牛馬の病氣治療の呪いは依頼が少なくなったので忘れてしまった、と語っている。マッサージ師から点字を習い、一九六〇年代から、青森県が観光化に力を入れた恐山にも通っている。

桜井徳太郎は一九七〇年代のオカルトブームが都市における民間宗教者の隆盛をもたらし、南部の巫女たちにも影響を与えたと見ている（「南部巫俗の風土と地域性―巫女と神子の生態と社会的機能―」地方史協

議会編『歴史と風土―南部の地域的形成―』二〇〇四年 雄山閣）。タケさんの業態には、都市部の民間宗教者の影響を受けて巫業が拡大した痕跡を見ることができ。タケさんは二〇〇九年からはJR八戸駅構内での八戸観光プラザでの口寄せに参加している（71頁）。従来の口寄せの場であった寺院のイタコマチを捨て、新たな場を選んだと言え。遠方からの依頼者にも慣れており、東京から来た調査者の、アメリカ人の死者の口寄せにも応じている（114頁）。研究者にも慣れており、彼等はタケさんが選んだ新

たな「依頼者」という見方も可能である。そのような意味で本記録はあくまで、「現代のイタコ」の記録であることが、価値を持つことを強調しておきたい。イタコの習俗が近現代を通じて残ってきたのは、同時代のさまざまなニーズに答え続けたことが大きな要因である。そのような視点で、タケさん自身の「さまざまなお客さんの要求に応えるためには、唱えごとの数（レパートリー）は豊富なほどよい。師匠から習った唱えごただけでは足りないこともある」（294―295頁）といった語りに改めて耳を傾ける必要がある。

本書にはイタコの宗教行為の動態について考える重要な記録が数多く示されている。例えば第三章《口寄せ》（一）（神仏迎え）―場による迎え方の違い―（70頁）では、口寄せ期間の開始前には、口寄せがうまくいくようにと、口寄せの場にあらかじめ神仏を勧請しておくとし、春秋の彼岸、忌日、寺院のイタコマチなどで方法が違うことが示されている。また、イベント会場や随時依頼者の求めに応じて行われる口寄せでは神仏迎えそのものが行われていない、と記述されている。このような記述は、変化の大きい時代を生き抜いてきたタケさんの記録の真骨頂といえるものであろう。

本書を前にして評者が感じたのは「さすががしい思い」であった。イタコの持つ技術や知識に対する編者たちの尊敬の念が、読者や視聴者にもまっすぐに伝わってくる。タケさんは「調査対象者」ではなく、同伴者であり、先生であったことが、編者の筆の端々から読み取れる。このようなまなざしが誤解されることの多かった宗教者の心を動かしたことは想像にかたくない。そのような読み直してみれば、本書はまた、研究者と宗教者のコミュニケーション行為の記録であるということもできる。

本書の丹念な記録は読者の多様な関心にしたがって、多様な読みを可能にするであろう。多数の読者が手に取り、長く活用されることを期待している。

二〇一三年一月
イタコ中村タケを記録する会刊
一八、〇〇〇円＋税
（やまだ・いつこ／弘前大学）